

## その他 (書評)

### 書評: パトリック ローら『児童・YA への リテラシー育成活動と読書推進活動：世界中からの事例集』

岡田 大輔  
(相愛大学 講師)

## 1 司書へのインタビュー集

本書, Patrick Lo et al. *Literacy and Reading Programmes for Children and Young People: Case Studies from Around the Globe* ?) は世界中の児童サービスや YA サービスに関わる計 41 人へのインタビュー集である。上下巻セットで 692 ページもある大部な本である。

編者のグループは、これまで公共図書館の館長・大学図書館の館長・文書館や博物館の学芸員・クラシック音楽の専門図書館の図書館員へのインタビュー集などを出してきているが、本書は学校図書館員へのインタビュー集 ?) の続編とも位置づけられるであろう。

本書でインタビューされている人は、大きな図書館の児童 YA サービスの責任者・公共図書館の前線で活躍する司書・個人でボランティアで「移動図書館」を運営する人など多岐にわたる。また、アメリカ (1 巻 1-10 章) やオーストラリア (2 巻 11-14 章) といった図書館先進国だけでなく、ルーマニア (1 巻 16 章) やクロアチア (1 巻 18-19 章) と言った旧東側諸国、シンガポール (2 巻 4 章) やカタール (2 巻 9 章) のような豊かな財政を元に図書館に力を入れている国、そして地方部にはインターネットが無いだけでなくそもそも電気がない、コンゴ民主共和国 (2 巻 16 章)・ウガンダ (2 巻 17 章)・ブルキナファソ (2 巻 19 章) といった国の話を読むことができる。

## 2 最新の動向が把握できる

本書は最新の図書館に関する動向をはじめとして、さまざまな新しい知識を伝えてくれる。

- ロサンゼルス の公共図書館 73 館 のすべてに児童向けスペースとは別に YA 専用のスペースがあり、一部の館を除いて児童サービス担当の図書館員と YA サービス担当の図書館員は別にいる (1 巻 1 章)
- 図書館が食事を出したり、目の検査をしたりすることに対して理由を聞いてくる人は 5~10 年前に比べて減ってきている、多くの人は図書館の役割は変わったと分かってくれている (1 巻 1 章)
- シアトル公共図書館では、ラベルや配架などで本のレベルが分かるようにしてきたが、「学校は子どもたちがいろいろな本を読む必要があると理解され」たことで、レベルごとに分けるニーズは少なくなってきた (1 巻 6 章)
- スコットランドでは (おそらくイングランドでも) 「イシューフィクション」と呼ぶ、精神疾患・いじめ・LGBT など特定のテーマを扱った本がここ 10 年間でよく見られるようになり、テレビに出ている「有名人の作家」の本も宣伝もあって増えてきた (1 巻 11 章)
- インドではカースト制もあり、書店に入ることさえためらう人がいる (2 巻 7 章)

など上げればきりが無い。もちろん、インタビューされたその1人の感覚であるものもあるが、現場にいる人の感覚を知っておくことは有用である。

本書ではある程度定形の質問がなされ、その中に「利用者がフェイクニュースに対するのを地元の図書館はどう支援しているか」があるが、その回答はさまざまである。

- 信頼できる情報源へのリンク集の作成 (1巻6章 シアトル)
- 図書館はSNSを十分に活用し、正しい指示を与えられる (2巻3章 中国)
- フィルタリングソフトで利用者の時間と労力を節約 (2巻10章 バングラデシュ)

と、新型コロナウイルスを意識して、図書館が正しい情報を提供するというアプローチもあれば、

- フェイクニュースの見分け方を定期的にSNSに掲載 (1巻4章 テキサス)
- 国立図書館はフェイクニュースや陰謀論との戦いに直接関与することはない。むしろ、子どもだけではなく、高齢者もメディアリテラシーを身につけることに重点を置いている (1巻17章 ラトビア)

と利用者が情報を判断できるようになるための支援を行うとの答えもある。

### 3 考え方の違いから学ぶ

このように、さまざまな考え方が得られるのが本書の魅力であり、個人的には“発展途上国に先進国で不要となった本を送るべきか”は興味深い。

インドで学校図書館を支援するアメリカ人は「先進国の古本を発展途上国に捨ててはいけない。発展途上国の学校にも新しい本や最新のテ

クノロジーが必要 (2巻9章)」と述べる。評者も同じ考えである。ただ、ジンバブエ出身でオーストラリアで働く研究者は、古本や売れ残った本を故郷へと送る慈善団体を設立し、クラウドファンディングなどで資金を集め、すでに3万冊以上を送って「ゴミを宝に変え」ている (2巻18章)。「電気が通っていない農村部では、オンライン学習は不可能で、物理的な本が必要」と彼は言い、先進国に住む私たちの考えを打ち砕いてくれる。

しかし、同じジンバブエの「ロバが引く移動図書館」の運営者は、移動図書館の屋根にソーラーパネルを取り付け、コンピューターとプロジェクターを使えるようにし、オンラインで本を読めるようにしている (2巻15章)。彼は「子どもたち一人一人にiPadを持たせるのが理想ではあるが、資金は限られている」と述べるとともに、インターネットがあったとしても、現地語の読み物はないことを訴える。

### 4 海外から日本を見る

日本の図書館関係者もインタビューされている。1人は国立国会図書館国際子ども図書館の永野祐子氏で、さまざまな取り組みが紹介される (2巻2章)。ただ、読んでいて面白いのは、「コロナの時代を乗り越えるのに役立つお勧めの本を教えてください」という定形の質問に対して、永野氏は「国立図書館の分館として、私たちは特定の本を推薦する立場にありません」と答える。日本で図書館学の教育を受けてきた者からすると、司書としてよくある対応と受け取れる。ただ、他国の司書は具体的な書名を上げるか、制作したブックリストなどを答え、「図書館は特定の本を特別扱いしない」は意識していないように感じる。本書は外国から日本の実践がどう見えるかも教えてくれる。

また、日本語に訳しづらい専門用語があり、これは日本にはそういう概念がないということを表している。

例えば、定番ではあるが“reading”があげられる。この語を「読書」と理解すると狭く捉えすぎであり、readingには図表やwebページを読むことも含まれている。個人的には、readingに当てはまる言葉が日本語にないことが、多くの人が図書館と言えば文学というイメージを持たれる遠因になっているのではないかとすら思う。

“literacy”も評者は「字の読み書き」と「情報リテラシー」とどちらの意味か考えながら読んでしまうが、少なくとも本書でインタビューされている人にとってはこの2つは明確に切り分けて使わっているのだろう。つまり無理に切り分ける必要はなく、連続した概念として、子どもは徐々にリテラシーを身につけていくと考える方がいいのであろう。

また、本書では“young adult librarian”“teen librarian”“youth librarian”と言った言葉が登場する。これは、「YA担当の司書」の意味なのだが、日本には「児童図書館員」の語はあっても「YA図書館員」の語はない。これは、ほとんどの日本の図書館にはYAを主に担当する司書がないためにこの語が定着していないのだと考える。日本で今後より力を入れるべき部分はこのようなところからも気づくことができる。

## 5 本書の留意点

ただ、本書は純粋な研究書とは言い難い。

その理由として、まず、話を聞ける人がどうしても偏ってしまうことである。特徴的な実践を聞くということで、日本からは先の国際子ども図書館と、東日本大震災の被災地でボランティアで移動図書館を運営した鎌倉幸子氏の2人が選ばれているのは理解できる。ただ、本書では

インタビューされている人は英語が話せる人に限られており、英語以外で図書館情報学の教育を受けた経験がある人は限られている。つまり、図書館に対する考え方は網羅的ではない。

そして、より学術的に問題があると考えられるのは、インタビューの方法が明確でないことである。話を聞く相手によって、メールなど文章のインタビューとZoomなどを用いた口頭のインタビューが使い分けられていると読み取れるのだが、その詳細は明記されていない。そして、メールでのインタビューであれば、定形の質問に対して返信があった後に追加の質問がなされるなど、何往復かのメールのやり取りがあるはずである。しかし、追加の質問は定形の質問の後に組み込まれ、再構成されている。これによって読みやすくなっているのだが、インタビューの記録ではないことを押さえて読む必要がある。

そして、再構成されている割には追加の質問が物足りないところがある。

例えば、日本の国際子ども図書館の章では、中学生・高校生向けの「調べもの体験プログラム」などが紹介されるが、なぜ公共図書館がそこそこある日本で国立図書館が直接サービスしなければならないのかは問われない。

また、アイスランドでは旧宗主国であるデンマーク版のデューイ分類法を使用している、それは(第二次大戦の後の独立後も)かつてはアイスランド大学では図書館学を学ぶことができず、多くの図書館員の多くがデンマークで図書館学を学んでいたからであろうと語られる(1巻14章)。本書のテーマは組織化ではないものの、それで不便をきたさないのか、アイスランドとデンマークの番号を入れ替えて使えばいいのではないか、独自の分類がないのであれば標準的なDDCのほうがいいのではないか、といった疑問は解消されない。

その対比で言えば、ノルウェーのかつての宗主国もデンマークであるのだが、ノルウェーではデンマーク語に近い bokmål と、“本来の”ノルウェー語を取り戻そうという nynorsk の2つの言葉が使われている。1巻13章では、nynorsk で書かれた本を広める活動が紹介され、「nynorsk のネイティブスピーカーの誇りを刺激し、nynorsk の文章や作家とのつながりを深め」「bokmål 話者には nynorsk や nynorsk 文学との前向きな出会いを提供」することが目的と語られるが、これが社会の中でどういう意味合いを持っているのかなどは追及されない。

確かに、イスラム圏の司書に「イスラム教以外の本・性教育の本・進化論の本などがありますか」などと聞くのだが、本書において相手が答えにくいであろう質問はこれぐらいであり、前著に比べ減っているのは残念なところである。

## 6 明日のヒントがつまっている

もちろん、これらの問題点を補っても本書から学べることはたくさんある。本書には明日の

実践や研究につながるヒントや材料がいっぱいつまっている。

## 紹介した本

- 1) Patrick Lo, Stephanie H. S. Wu, Andrew J. Stark, and Bradley Allard, *Literacy and Reading Programmes for Children and Young People: Case Studies from Around the Globe*, Apple Academic Press, 2022, 692p.
- 2) Patrick Lo, Heather Rogers and Dickson K.W. Chiu, *Effective School Librarianship: Successful Professional Practices from Librarians from the World*, Apple Academic Press, 2018, 534p.

(この稿の評者(岡田)は、本書?)及び前著?)を著者から無償で提供されている。)